

河南町の旧家に残されていた古文書



宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長

ひらかわ あらた
平川 新

未来への航路

宮城資料ネットの結成

地震で石巻と関係を持ったのは、2003年7月26日に発生した宮城県北部地震からです。8月1日に河南町の被災調査に入り、その後チームを組んで古文書など歴史資料の保全活動を始めました。河南町のほか、被害の激しかった鳴瀬町、矢本町、南郷町、鹿島台町にも入りました。各町での調査・保全活動には、毎回20人程度の歴史関係者や学生たちが参加してくれました。5町で合計192軒の旧家を訪問しています。その年の11月まで、この活動は続きました。

歴史関係者が被災地に入るのは、災害を機に旧家に残されている古文書が廃棄された

100年から200年もの間、土蔵に眠り続けていた古文書は紙

り、散逸したりするところがあるからです。武士の子孫の家には由緒書や領地文書、江戸時代には村役人を務めた家その家の経営文書や、蔵に納められていることが多いためですが、地震の揺れで土蔵が傾いたり壁が落ちたりしますと、修復費用がかかります。漆喰壁であれば数百万円もかかることがあります。

④ 宮城県北部地震と河南町のレスキュー

河南町のレスキュー

喰い虫にやられてボロボロになっていたり、収納した箱はネズミの

巣になっていたたりするものがあります。しかもくずし字で書かれた古文書は、読むことがむずかしいのです。伊達政宗の書状など、著名人の史料であれば床の間に飾って大事にされるのですが、ほこりまみれの古文書はガラクタと一緒に処分されてしまふことがありま

す。ところがその古文書こそが、地域の歴史を明らかにする大事な記録なのです。私たちはこの北部地震を機に、旧家に残されている古文書を救済し保全するために、NPO法人宮城歴史資料ネットワーク(宮城資料ネット)を結成しました。古文書を守る活動は現在も続いています。

母屋も土蔵もかなり壊れており、蔵の中にあつた大量の文書箱も散乱していました。雨漏りも激しく、濡れるのを避けるため別棟に文書箱を移し、整理作業を行いました。10万点を超える古文書には、地主史料のほかに漁業、鉱山、鉄

道、銀行など多方面にわたる投資・経営関係史料が大量にありました。日本資本主義の成立過程を解明し、近代化の道筋を研究することが可能な、大変貴重な史料群でした。何度も通って整理する私たちの姿を見て、ご当主の齋藤武子さんは、「そんなに大事な記録なの?」と驚いておられました。齋藤さんは膨大な史料がこれまで埋もれてきたことを惜しまれ、歴史研究の役に立てばと東北大学図書館に寄贈を申し出られたのです。受け入れた図書館では、史料目録を作成し公開しています。

2005年、齋藤氏庭園は国の名勝に指定され、石巻市が管理しています。大富豪の栄華の跡を偲ぶことができます。 (次回は11月20)

前谷地の齋藤家

河南町の「齋善」こと齋藤家は、江戸時代



ひらかわ・あらた

昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26-31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。



齋藤家の土蔵から古文書箱を運び出すメンバー